このスポット・おすすめ!

天然素材のだしの旨味を感じる
体にやさしい沖縄そば

まいにち食堂

スープと特注麺が好相性
新メニューも続々と誕生予定

今年3月にオープンした、沖縄そばがメインの食堂です。豚、鶏、カツオ、野菜など十数種類の具材をじっくり煮込んでだしを取り、丸一日かけて仕上げたスープは、ほんのり甘みが感じられて、体にスッとなじむやさしい味わい。「おいしさを追求するのはもちろんのこと、スープの塩分が人の体の血中濃度に最も近くなるように計算しています。小さなお子さまから年配の方まで、安心して食べてほしいから」とは店主の伊波和晃さん。スープとの絡みを考えて特注した麺との相性もばっちりです。

伊波さんが目指しているのは、「地元の人に愛されて、観光客からも喜ばれるような沖縄そばをつくり、後世に伝えること」。大きなきっかけは20代の頃、修業していた人気店が急きょ店を畳むことになり、「人を育てなければ味が途絶えてしまう」と痛感。以後は飲食店をマネジメントする側に回り、理想とする沖縄そば店の開業を目指して、人材育成や店舗運営を学んできました。

キッズコーナ完備でカフェのような雰囲気の現在の店内は、「子ども連れの女性でも気軽に来られるように」と配慮してのもの。店名を「食堂」としたのは、「沖縄そば以外のメニューも徐々に増やしていき、古くから親しまれてきた食堂文化を継承していきたいから」。手始めに11月には、カレーライスが登場する予定です。

住所：読谷村喜名390
　　コーポすず風1F
電話：098-958-7250
営業：11:30～16:00
　　(L.O.、売り切れ次第終了)
休み：水曜日
駐車：6台

〈おもなメニュー〉
＊軟骨ソーキそばセット…880円(単品730円)
＊三枚肉そばセット…880円(単品730円)
＊すーちかーそばセット…880円(単品730円)
＊ゆし豆腐そばセット…850円(単品700円)
＊あーさそばセット…850円(単品700円)

なぞなぞに読者答えて ☺❖プレゼント❖☺

このスポット・おすすめコーナーで紹介の
『まいにち食堂』で使える
軟骨ソーキそばセット ペア食事券
3名様

Q なぞなぞ
目を開けると見えないのに、目を閉じると見えるものは？

ヒント
寝てるときに、見るものだよ

10月号当選者　前号の答え〈カラス〉

あめでとうございます！
★仲宗根寿子さん(嘉手納町在住)
★比嘉由奈さん(浦添市在住)
★仲村琉希さん(八重瀬町在住)

ワイワイ広場

読者プレゼント応募方法

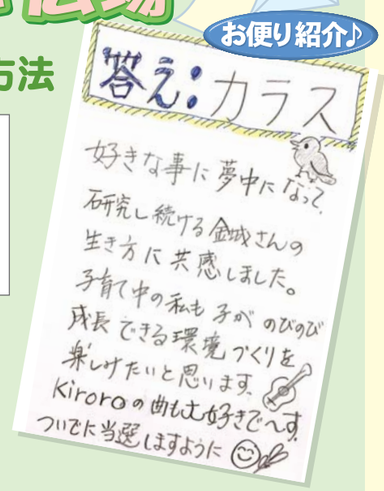
宛先
切手 はがき 904-0303
読谷村字伊良皆237-1
ウインズ
『広報誌係』
①住所 ②氏名
③年齢 ④職業
⑤電話番号

裏
⑥なぞなぞの答え
⑦ご意見
ご感想

応募者の中から抽選で、
読者プレゼントを進呈致します。
どしどしご応募下さい！

締め切り
2017年11月20日消印有効
「当選者は次号(Vol.159)にて発表致します」

お便り紹介♪

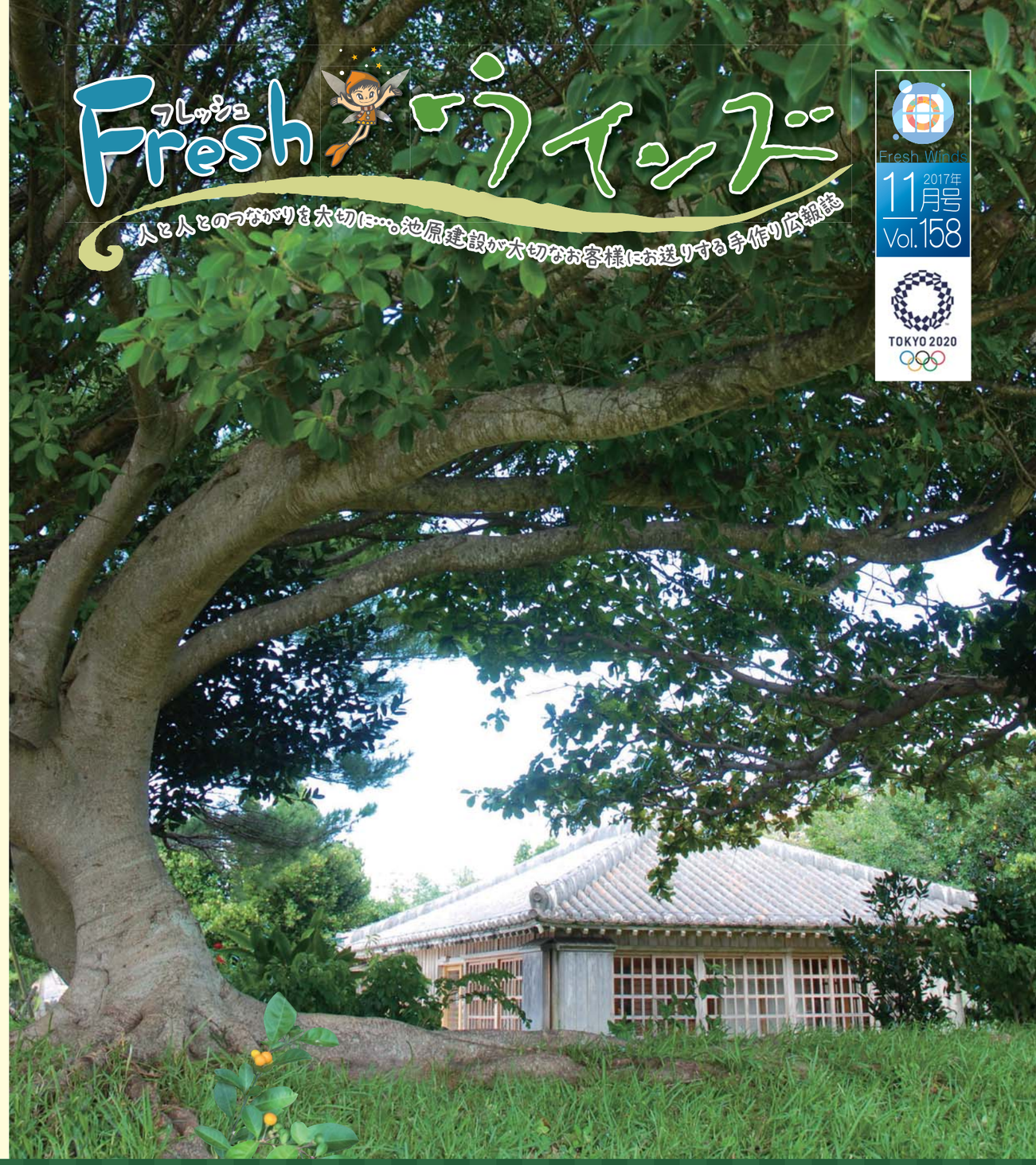


『Freshウインズ』は、建築でお手伝いをさせて頂いた施主様をはじめ、地域にお住まいの方など、ご縁をいただいた皆様に配布致しております。諸事情により配布不要となった際は大変お手数ですが、その旨ご連絡下さい。(ウインズ広報誌係)

(株)池原建設 企画事業部ウインズ
〒904-0303 沖縄県読谷村字伊良皆 237-1
営業時間 / 9:00～18:00(年末年始を除く)

住宅のメンテナンスや
補修等のご相談は、お気軽に
スタッフへお声掛け下さい！

0120-229-512　ウインズ 池原建設　検索



Fresh(フレッシュ) ウインズ

人と人とのつながりを大切に…。池原建設が大切なお客様にお送りする手作り広報誌

Fresh Winds
2017年 11月号
Vol.158

TOKYO 2020

今月の歳時記

11月4日(土)・5日(日)	**第12回 読谷やちむんと工芸市** 会場・開催地／読谷村・Gala青い海
11月5日(日)	**第32回 全島獅子舞フェスティバル** 会場・開催地／うるま市・安慶名闘牛場
11月11日(土)・12日(日)	**ツール・ド・おきなわ 2017** 会場・開催地／名護市以北一円
11月24日(金)～26日(日)	**第38回 壺屋陶器まつり** 会場・開催地／那覇市立壺屋小学校

ハロウィーンを過ぎると町は一気にクリスマスに向けて衣替え。あちこちでイルミネーションの点灯が始まります。 台風で延期になった「読谷やちむんと工芸市」は11月4日・5日開催。11月半ば以降は「ツール・ド・おきなわ」やマラソンなど、スポーツイベントも増えてきます。

ストリートストーリー
Street Story!

100年以上受け継がれた伝統芸能が4年に一度の晴れ舞台
区民一丸で上演を支える読谷村喜名の「組踊・忠臣護佐丸」

■手の込んだ3種類の舞台セットも喜名区民が自ら製作したもの。このうちお城のセットでは、背景の月と松を微妙に変化させることで、勝連城・中城城・首里城のシーンを使い分けていました。ご覧になっていた方、お気づきになりましたか？

明治時代の初演から100年以上、読谷村喜名の一大イベントとして上演され続けてきた伝統芸能「組踊・忠臣護佐丸」が10月8日、喜名公民館前の屋外ステージで開催されました。舞台で演じる役者や地謡（じかた）はもちろん、それを支える裏方のスタッフも全員が喜名区民という地域力あふれる催しで、集まった観客は400名以上。区外村外からの評判も高く、来年3月には国立劇場おきなわでの初公演も決定しています。開催1週間後のまだ余韻冷めやらぬ中、関係者の皆さんに話を聞きました。

息をのむ長ゼリフの連続 約2時間に及ぶ迫真の舞台

組踊の「忠臣護佐丸」は、琉球王朝時代の1458年に勃発した「護佐丸・阿麻和利の乱」を題材にしたストーリー。中城城主の護佐丸が勝連城主の阿麻和利の謀略に倒れ、生き延びた三男の亀寿が後に親の仇を討つというあらすじです。組踊の創始者である玉城朝薫が創作した「朝薫の五番」の一つ、「二童敵討（にどうてきうち）」ともよく似た演目で、読谷村喜名をはじめ県内あちこちの地域では、人気の村芝居として古くから親しまれてきました。

喜名自治会会長
松田安雄さん

喜名伝統芸能保存会事務局
平良良昭さん

喜名伝統芸能保存会副会長
照屋富成さん

喜名伝統芸能保存会会長
波平等志さん

喜名で初めて上演されたのは1906（明治39）年。過去の資料によると、首里から現在の読谷村伊良皆に移住した「フジチのターリー」と呼ばれる人物によって伝えられ、演技はその当時「琉球の団十郎」と評されていた沖縄随一の名役者、玉城盛重が指導にあたったとされています。

その後は戦争などによってたびたび中断を余儀なくされたものの、区民の熱意により繰り返し復活。92（平成4）年の上演後は喜名伝統芸能保存会が中心になって態勢を整え、現在はオリンピックと同じ4年に一度のペースで継続しています。

「一般的に村芝居は、獅子舞や雑踊りなどと一緒に、十五夜豊年祭の出し物の一つとして演じられることが多いのですが、喜名ではこの忠臣護佐丸の上演のみ。他の地域と比べて、セリフの長いシーンが数多く取られ、全体で10の幕を一つ一つじっくり展開する点が大きな特色です。前座の『長者の大主』と合わせたら、上演時間は120分以上にも及びます。毎年開催してほしいとの声もよくいただくのですが、これだけ大がかりな舞台を準備するにはかなりの時間とパワーが必要で、仕事や家事どころではなくなるかもしれません（笑）」。

今回は上演の1年ほど前から配役の人選を進め、年明けに稽古をスタートしました。

若い世代が自発的に参加 稽古の遅れも直前で挽回

配役は基本的に本人からの立候補制。他薦や押しつけは一切なく、若い世代からも自発的に毎回手が挙がり、「子どもから年配者まで、自然と協力し合える関係が受け継がれていることが喜名の誇り」と皆さんは胸を張ります。今回は特に20代、30代が多く加わったことで、舞台に立った総勢30余名の役者の平均年齢は40代前半に。地域の新陳代謝が活発であるのはいいことですが、「以前の衣装だと体に合わない役者が続出し、大幅に新調しなければなりませんでした」。

役作りはまずセリフを覚えることからスタートします。言葉はもちろん一言一句、ウチナーグチであることに加え、「現在はまったく使わないような言い回しも多く、最初の頃は自分でも何をしゃべっているのか分からないものですよ」。しかも前述したように、喜名のセリフの長さは特筆もの。その上で専門的な演技指導を受けながら、正しいイントネーションを覚えたり、立ち居振る舞い方を身に付けたりしなければなりません。それでも繰り返し練習しているうちに、「自然と“さま”になってくる」というから不思議なものです。

今回最も苦労したのが、「全員がそろう機会がなかなかなく、全体を通した練習が直前までできなかったこと」。毎週そのとき集まったメンバーで、場面ごとにできる稽古を個別にこなしてはいたものの、それだけではやはり実際の舞台感覚がつかめず、さらに「どのタイミングで背景のセットを入れ替えるのか」という裏方の準備にも影響します。本番の日が近づくにつれて、関係者の皆さんには「今年は本当に開催できるのか」と焦りの色が見え始めました。

初めてリハーサルを行えたのは本番の2週間前。「案の定、演技も舞台の進行もミスの連発でしたが、あらゆる失敗をこのとき吐き出したので、それをまとめて確認できてよかったかもしれません。役者の目の色もガラリと変わりました」。10月8日に向けて一気にスイッチが入りました。

伝統を途切れさせないために 世代間の円滑な交流を保つ

そして迎えた本番当日。開演に先立ち、チンク隊がボラや太鼓を鳴らしながら喜名区内を2時間ほど道ジュネーし、組踊の開催を告知。やがてステージ前に戻ってくると旗頭が合流し、チンク隊の演奏と「ひゃーゆい」の掛け声に合わせて棒を高々と振り上げ、上演の成功を祈願しました。

■開演前の道ジュネーでムードを盛り上げてくれたチンク隊。上演の陰には多くの区民の協力がありました

舞台は17時スタート。会場に用意していた300脚の椅子はあっという間に埋まり、立ち見客も出るほどの大盛況。護佐丸が阿麻和利に追われ、妻子とともに自害する場面では深いため息が漏れ、護佐丸の息子の亀寿が大城大主とともに阿麻和利を討つ最後のクライマックスでは大きな拍手が沸き起こりました。

■舞台の進行中は緊張の連続。「2時間があっという間」に感じられるそうです

4年ぶりの舞台を無事に見届けた関係者の皆さんは、「上出来ですね。直前まで開催できるかハラハラしてたのに」と胸をなで下ろしつつ、「何も言うことはありません。役者も地謡も裏方のスタッフも、全員が実力以上の力を発揮してくれました」と笑顔。それでも上演後、役者の若者らに感想を聞くと、「もっと上手に演じられたはずなのに、と残念がっていました。来年3月の国立劇場おきなわでは、この悔しさをバネにして、一段と磨きのかかった名演技を見せてくれるでしょう」。今回見られず悔しい思いをした方もぜひお見逃しなく。「国立劇場おきなわの年間スケジュールにもばっちり書き込まれてしまったので、もう後戻りはできません（笑）」。

一息つけるのもつかの間、やがて2021年に向けた準備が始まります。「伝統は一度途切れてしまうと、復活させるのにどれだけエネルギーを要するかは、先輩方の苦労を見ればよくわかります。喜名は現在、世代間の交流がいい形で機能しているので、この状態を次回、次々回へとしっかり継承していきたいですね」。また喜名には他にも、過去に途絶えたままの芸能文化が幾つもあり、「各種団体の協力を得ながら復活の道筋をつけ、組踊忠臣護佐丸のように恒例化していければ」と企てているそうです。

■公演後は関係者全員が舞台に集まりあいさつ。大きな歓声に包まれました